



不登校対策の考え方

RTIモデルの採用とエビデンス

(公社)子どもの発達科学研究所 和久田学

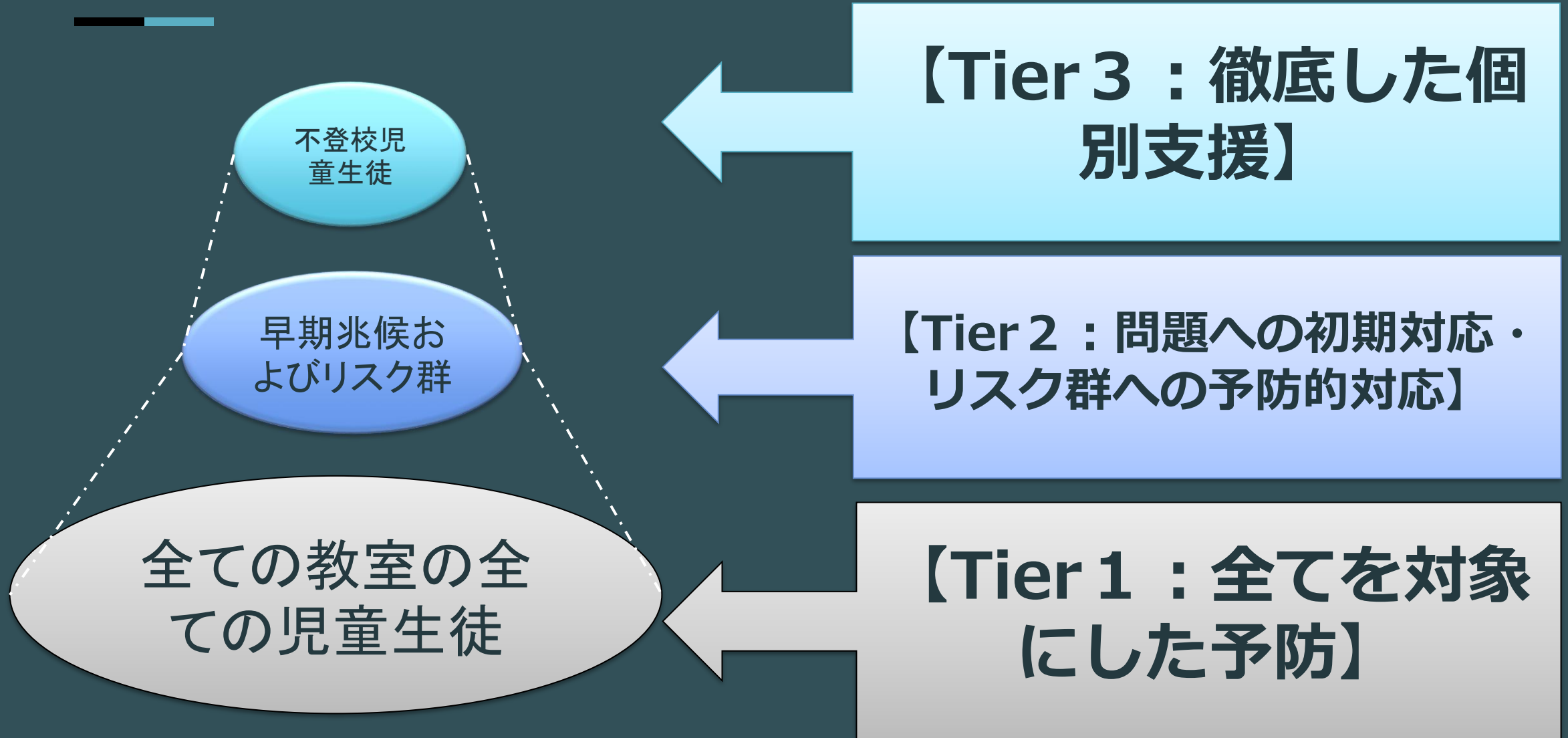
230214

現在のモデル

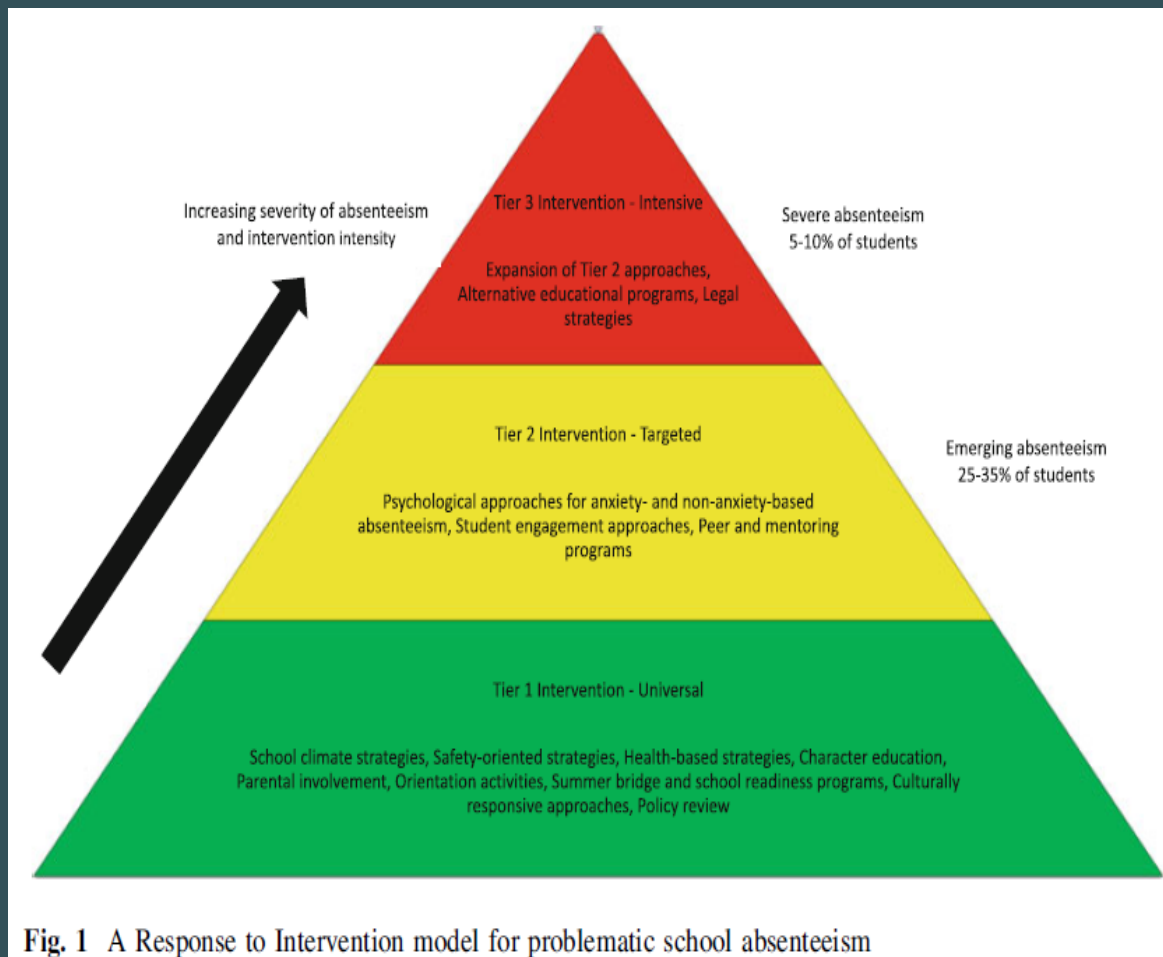


【不登校支援】すでに不登校状態にある児童生徒に対する支援の充実を中心に行う。

RTIモデル



不登校を減らし登校を促進するためのRTIモデル



- RTI (Response To Intervention) モデルとは、支援介入に対する反応モデルであり、Tier 1：予防から Tier 2：早期発見早期支援、Tier 3：介入と段階を追って支援を行うもの。
- 支援ニーズが明確になってから支援を行う「失敗を待つモデル」からの脱却が目的である。
- 学校の教師を中心に、保護者、教育委員会、地域など、チームを組んで実施することが望ましい。

RTIモデルでの整理

	対象	支援内容	主な支援者
Tier 1	全ての児童生徒	<ul style="list-style-type: none"> ● 教育委員会、学校、それぞれのレベルで学習環境や活動にバリエーションを増やし、児童生徒の選択肢を広げる。 ● 学校風土の計測と向上 ● メンタルヘルスリスクのある児童生徒の早期発見と支援 ● 心理教育を全ての教室で実施。 ● 教員研修の実施 ● リスクのある児童生徒の発見と支援（合理的配慮の提供を含む） 	全ての教師
Tier 2	不登校傾向の児童生徒 (休みはじめ、集団適応の問題が明らかになった、など)	<ul style="list-style-type: none"> ● アセスメントの結果に応じた支援の実施、場合によっては環境の変更 ● 保護者への情報提供、連携 	生徒指導主任 スクールカウンセラー
Tier 3	不登校児童生徒	<ul style="list-style-type: none"> ● 詳細なアセスメントの実施 ● 個別支援計画の作成とそれに基づいた支援 ● 他機関連携 	スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、教育委員会の専門家等

Tier 1. 予防支援の実現のために

- 予防支援は、「ない状態」を「ない状態」のまま保つことが目的になるので、非常に難しい。
- 「ない状態」について、科学的計測が必要になる。



文部科学省委託事業

子どもみんなな プロジェクト

大阪大学をはじめとした10大学コンソーシアムが、連携教育委員会と協力して行った事業。第1期（2014～2019年度）では、子どもの発達科学研究所が事務局となり、いじめ等の子どもの行動についての研究の中心的役割を担った。

【理念】

1. 子どものこころの発達に関する問題は、一部の子どもの問題ではなく、すべての子どもの問題であること
2. 子どものこころの発達に関する問題は、教育学だけでは適切な対処が難しく、脳科学や医学、発達心理学など他の学問分野の知見を採り入れた対策が必要なこと、
3. 教育現場と研究者の協働が大切であり、経験主義に陥りがちな教育現場に科学的な視点を入れる一方、研究者は研究のための研究に陥ることなく教育現場のニーズに沿った研究成果を現場に還元するように努める必要があること

登校状況に関する調査

子どもみんなプロジェクト

1. 1ヶ月の欠席日数に関連する要因

調査時期：2016年11月

対象：調査前1ヶ月間の欠席日数の提供について研究協力の同意を得られた、市内の中学校3校（生徒919名）、小学校5校（児童1028名；4年生以上）、計1947名

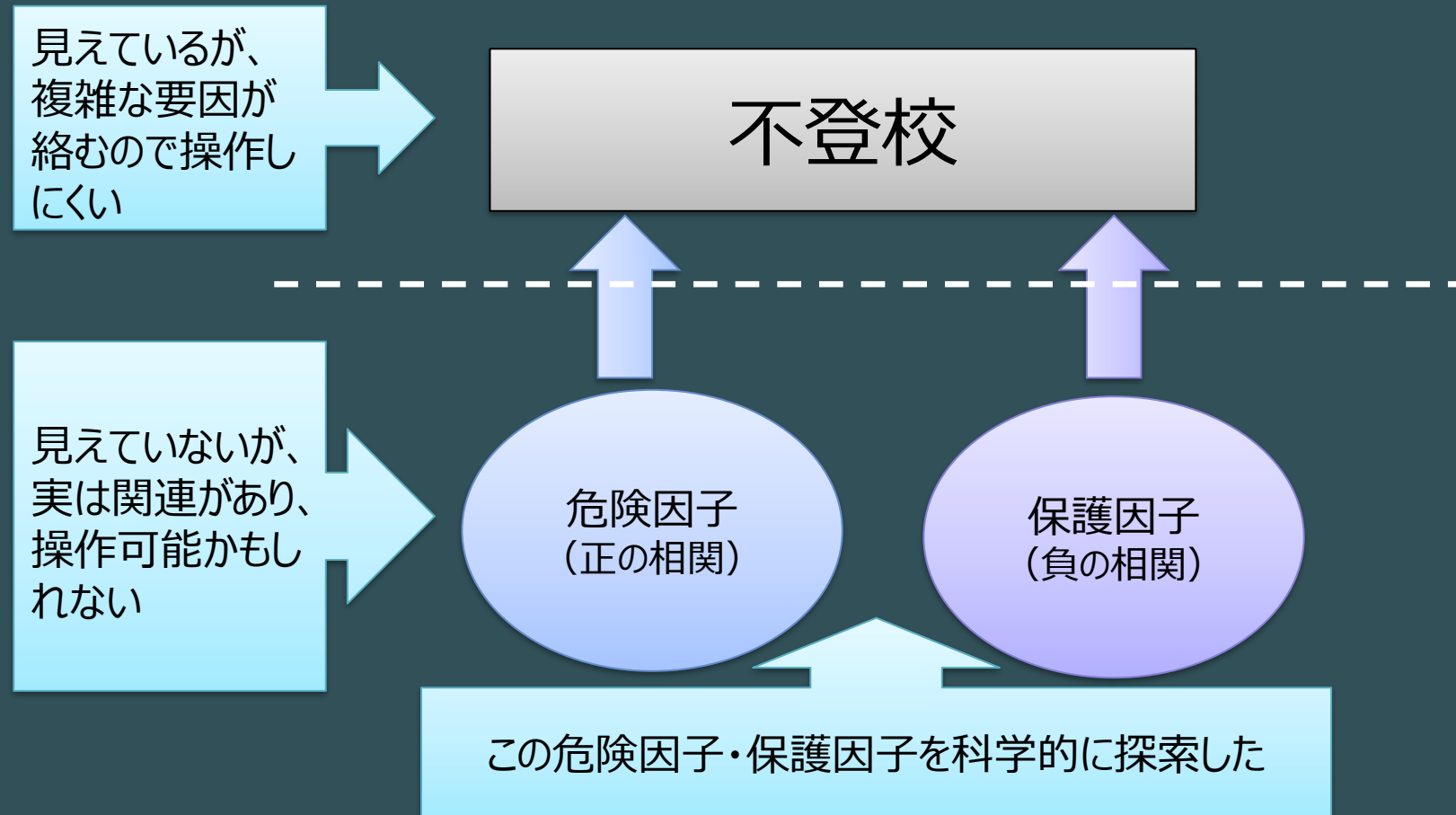
調査内容

学校より：2016年10月1ヶ月間の欠席・遅刻・早退日数

児童生徒：いじめ被害・加害・目撃（19項目）、学校風土（32項目）、インターネット利用時間、自己評価の成績、家で話す言葉、SDQ困難さ、神経発達症、両親の教育歴、世帯年収

私たちの興味は・・・

- 単なる数字であれば、これまでもわかっている。
- 本当に知りたいのは、「『その数字（不登校）』を減らすには、何をすれば良いのか」ということ。



1ヶ月の欠席日数に影響する要因

登校の問題に関連する要因		オッズ比
性別(男子の場合)		1.2
国籍(日本以外の場合)		2.07*
成績(自己評価で50点未満の場合)		2.32****
自閉スペクトラム症(ASD)	疑い	3.07
	診断	4.33**
ADHD	疑い	1.81
	診断	13.89****
知的障害	疑い	3.35****
	診断	7.71****
いじめ被害経験(1ヶ月に2,3回以上)		1.97****
いじめ被害経験(2,3ヶ月に1度でも)		2.24****
いじめ加害経験		1.33
友達の数		0.70****
孤立(友達がいないと回答した場合)		4.30***
インターネット使用の有無		1.1
インターネットの時間		1.22*

登校の問題に関連する要因		オッズ比
抑うつ尺度の得点(1点ごと)		1.10****
不安尺度の得点(1点ごと)		1.07****
肥満傾向		1.67*
世帯収入		0.74****
父親の教育歴		0.88****
母親の教育歴		0.81****
父親の年齢		0.81**
母親の年齢		0.77***
一人親家庭(推定)		1.62***
全体的な支援の必要性(子どもの強さと困難さ尺度/自己評価)	high need	2.37****
	some need	1.88***
全体的な支援の必要性(子どもの強さと困難さ尺度/保護者評価)	high need	8.29***
	some need	2.62****
学校風土合計点(児童生徒の評価による)		0.98****
学校風土合計点(保護者の評価による)		0.97****
学校風土合計点(担任の先生の評価による)		1.0

※単回帰分析による。

子どもみんなプロジェクト・ニュースレターより

1ヶ月の欠席日数に影響する要因

	リスク比 (95%信頼区間)	p 値	解釈
いじめ被害	1.54 (1.02, 2.33)	0.04	いじめ被害があると欠席のリスクが高い
いじめ加害	0.97 (0.35, 2.67)	0.95	
いじめ被害/加害	1.24 (0.60, 2.55)	0.56	
いじめ目撃	0.79 (0.53, 1.18)	0.25	
学校風土 感じ方の良さ	0.93 (0.72, 1.22)	0.61	
ネット依存度	1.09 (0.93, 1.28)	0.27	
自己評価成績	0.99 (0.98, 0.996)	0.006	自己評価の成績 (1点単位) が高いほど欠席のリスクが低い
言葉 (日本語以外)	2.28 (0.31, 16.76)	0.42	
言葉 (両方)	1.65 (0.64, 4.23)	0.30	
学年	0.92 (0.82, 1.04)	0.20	
性別 (女性)	1.30 (0.90, 1.87)	0.16	
SDQ全体的な困難さ	1.03 (0.99, 1.07)	0.10	
神経発達症	2.92 (1.47, 5.80)	0.002	ASDまたはADHDの診断または疑いがあると欠席のリスクが高い
父の教育歴	0.92 (0.83, 1.01)	0.08	
母の教育歴	0.94 (0.83, 1.08)	0.40	
世帯年収	1.04 (0.96, 1.12)	0.33	

➤ 子どもに問題があるから不登校になる、というのではなく、そうした子どもに必要な支援が提供できない学校に課題があると捉えるべき

※負の二項回帰分析による。すべての要因をモデルに投入。

子どもみんなプロジェクト

不登校対策の考え方：静的リスク×動的リスク

静的リスク：個人要因、子どもの特性

発達特性、感覚特性、トラウマ（ACE・生育歴）、家庭環境、
（起立性調節障害）

動的リスクⅠ：学校環境、学校風土

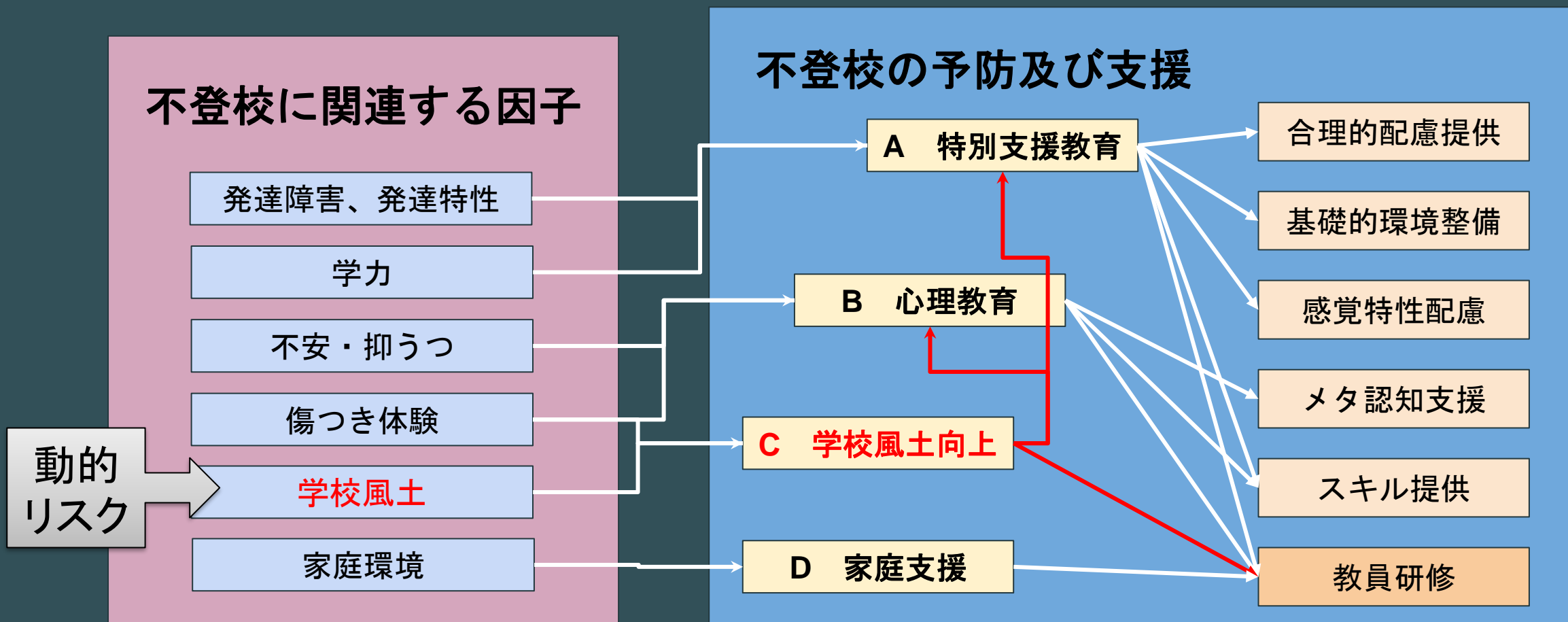
学校体制、クラス人数、学級環境、授業、規律・ルール
安心安全の感覚、集団の雰囲気
特別支援教育（インクルーシブ教育）、
教師（行動）

動的リスクⅡ：子どものスキル

向社会性行動、いじめ予防教育、メタ認知・自己コントロール、（生活習慣）

静的リスクは動かさないが、動的リスクは動かせる。つまり、動的リスクが問題への対処方法となる。
（ただし、ACEのような一部の静的リスクは、予防することが可能）

不登校に関連する因子とそこから考える対策



学校風土研究の 展望

- ▶ 100年以上前から注目されている学校風土研究を総括する。
- ▶ 学校風土が子どもの発達に与える影響、問題の予防について、100以上の研究を紐解きまとめている。

A Review of School Climate Research

Amrit Thapa, Jonathan Cohen
National School Climate Center

Shawn Guffey, Ann Higgins-D'Alessandro
Fordham University

For more than a century, there has been a growing interest in school climate. Recently, the U.S. Department of Education, Center for Disease Control and Prevention, Institute for Educational Sciences, a growing number of State Departments of Education, foreign educational ministries, and UNICEF have focused on school climate reform as an evidence-based school improvement strategy that supports students, parents/guardians, and school personnel learning and working together to create ever safer, more supportive and engaging K–12 schools. This work presents an integrative review on school climate research. The 206 citations used in this review include experimental studies, correlational studies, literature reviews, and other descriptive studies. The review focuses on five essential dimensions of school climate: Safety, Relationships, Teaching and Learning, Institutional Environment, and the School Improvement Process. We conclude with a critique of the field and a series of recommendations for school climate researchers and policymakers.

KEYWORDS: school climate, school improvement, socio-emotional learning, prosocial education, bullying.

Over the past three decades, researchers and educators have increasingly recognized the importance of K–12 school climate. In the United States and around the world, there is a growing interest in school climate reform and an appreciation that this is a viable, data-driven school improvement strategy that promotes safer, more supportive, and more civil K–12 schools. The Centers for Disease Control and Prevention (2009) recommends school climate reform as a data-driven strategy that promotes healthy relationships, school connectedness, and dropout prevention. The Institute for Educational Sciences includes school climate as a sound strategy for dropout prevention (Dynarski et al., 2008). The U.S. Department of Education (2007) has invested in the Safe and Supportive Schools (S3) grant program to support statewide school climate measurement and the study of school climate improvement efforts. A growing number of State Departments of Education are focusing on school climate reform as an essential component of school improvement and/or bully prevention. Additionally, an increasing number of

1

学校風土とは？

- ▶ 学校風土への注目は、今に始まったことではない。100年以上前から、学校風土が子どもの行動に影響を与えている事実を研究者たちは気づいており（Perry, 1908; Dewey, 1916）、世界中で学校風土に関する研究が行われている。
- ▶ National School Climate Council（2007）は、学校風土を「教師と児童生徒の学校生活での経験パターンからくるもので、学校の決まり、目標、価値観、人間関係、授業実践、組織体などを反映したもの」と定義づけている。よい学校風土を保持することは、将来、民主主義社会で生産的で満足のいく生活を送る可能性が高い若者を育てることになる。また、こうした学校風土は、児童生徒とその家族、教職員が一緒になって作るものとされる。

学校全体の「学校風土」といじめ、登校問題との関連

アウトカム	係 数	効果量	解 釈
いじめ被害 (%)	-0.35****	0.08 (中～大)	学校風土の合計得点が1点上がると、いじめ被害の割合は0.35%少なくなる
欠席日数 (日)	-0.017****	0.50 (大)	学校風土の合計得点が1点上がると、平均欠席日数は0.017日少なくなる
遅刻日数 (日)	-0.001***	0.004 (小)	学校風土の合計得点が1点上がると、平均遅刻日数は0.001日少なくなる
早退日数 (日)	-0.005****	0.29 (大)	学校風土の合計得点が1点上がると、平均早退日数は0.005日少なくなる

※学校サイズ（調査した児童生徒数）と校種（小学校か中学校か）で統制した結果

**学校全体の学校風土が良いことは、特に欠席日数と早退日数に強い関連を示した。
いじめ被害の割合、遅刻日数との関連もみられた。**

クラスごとの「学校風土」といじめ、登校問題との関連

アウトカム	係数	効果量	解釈
いじめ被害 (%)	-0.25****	0.03 (中)	学校風土の合計得点が1点上がると、クラスごとのいじめ被害の割合は0.25%少なくなる
欠席日数 (日)	-0.002*	0.003 (小)	学校風土の合計得点が1点上がると、クラスごとの平均欠席日数は0.002日少なくなる
遅刻日数 (日)	0.0001		
早退日数 (日)	-0.0002		

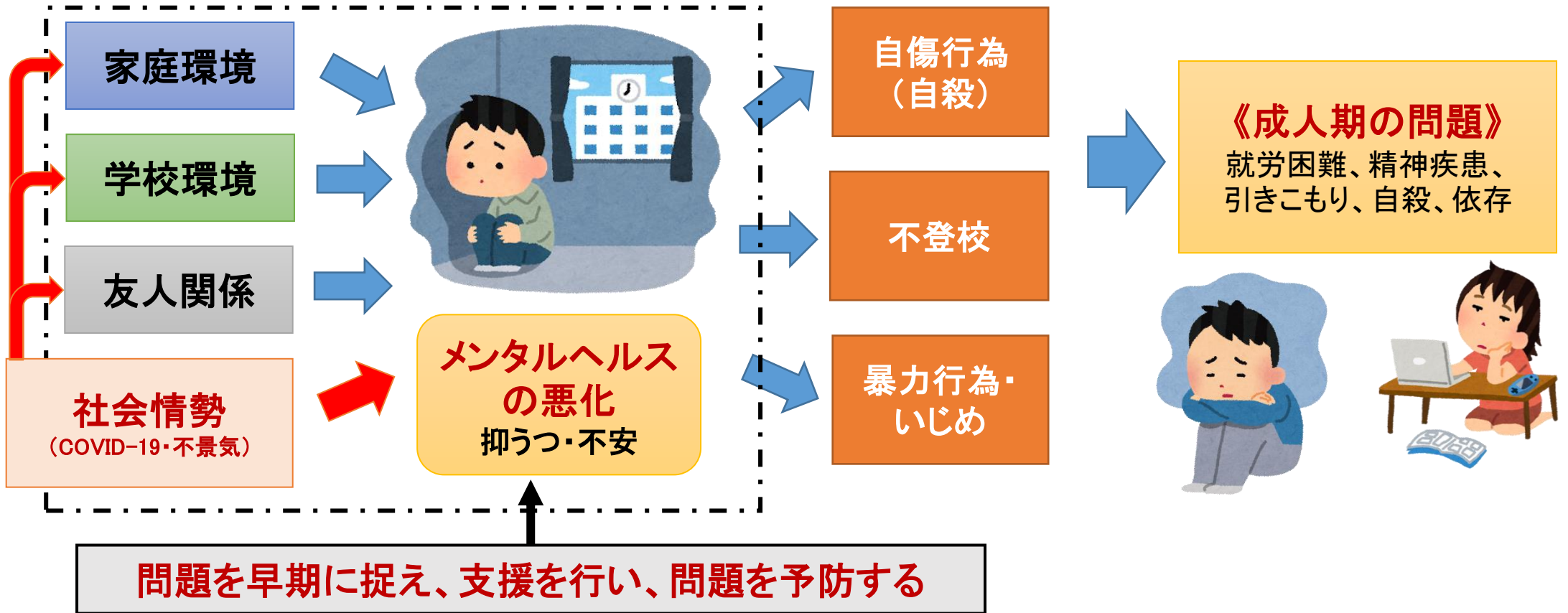
※クラスサイズ（調査した児童生徒数）と校種（小学校か中学校か）、学年で統制した結果

クラスごとの学校風土が良いことは、いじめ被害と欠席日数に関連を示した。

Tier 2. 不登校の早期兆候を発見するために 必要なデータ収集

- メンタルヘルスのスクリーニング： こころの健康調査 NiCoLi
児童生徒のメンタルヘルスの状況を正確に把握する（調査時）。
- 日々の体調と気分の変化： デイケン
毎日のデータの連続性を把握する。同時に援助要請の仕組みを提供する。

メンタルヘルス調査NiCoLi



メンタルヘルス調査NiCoLi

子どもの入力画面



Webアプリのフィードバック画面

NiCoLi2.0 先生用

こころの健康観察 クラス別一覧

クラス 1年A組

—: 必要な項目への回答がありませんでした。
*: 回答していない項目があります。

出席番号 ↓	こころの元気さ ¹	学校での生活 ¹	友達のこと ¹	家での生活 ¹	ゲームやインターネット ¹
1	●●	●●	●●●●	●●●●●●	●●●●●
2	—	—	—	●*	—
3	●●●●●	●●●●●	●●●●●●	●●	●●●●●
4	●●●●	●●●●●●	●●●●	●●●●●	●●
5	●	●●●●●	●●●●●●●	●●	●●●●●
6	●●●●●	●●	●●●●	●●●●	●●●●●
7	●●●●	●●●●●	●●●●	●●●●●	●●●●●
8	●●●●	●●●●●	●●●●●	●●●●	●●●●●●
9	●	●●●●●●	●●●●●●●	●●	●●●●●
10	●●	●●	●●●●●	●●●●●●	●●

一覧表を印刷

とても良い	●●●●●●●●
良い	●●●●●●●
普通	●●●●●●
やや心配	●●●●
心配	●●●
とても心配	●●

支援ニーズのある児童・生徒の抽出

参考にする指標

【最優先】「こころの元気さ」

- 1つまたは○○2つの解析結果が出た児童・生徒
- 3つ以上だが、普段の言動、様子等を総合して、支援が必要と判断された児童・生徒

【参考値】その他の指標


- 1つまたは○○2つの解析結果が出た児童・生徒

重要: いずれも、●1つまたは○○2つはかなり深刻な状況であることが伺われますので、細心の注意を払い、迅速にフォローアップにつなげてください。

デイリー健康観察

デイケン

こころからだの連絡帳



ユーザー名

パスワード

ログイン

← デイケン

漢字 ひらがな

今日の体温を教えてください。

36.5℃

今日の体調はどうですか？いくつか選ぶことができます。

- 元気
- 微熱あり
- 発熱あり
- 嘔吐あり
- 下痢あり
- 頭痛あり
- 腹痛あり
- 咳あり
- 痰あり
- 喘息あり
- その他

← もどる

つぎへ ▶

ホーム画面にもどる

- 毎日の健康観察をデジタル化
- 相談ニーズの把握

『デイケン』Webアプリ



児童・生徒用



先生用

デイリー健康観察



先生用ダッシュボード

← デイケン

1月4日（水）学級の記録 前日の記録 翌日の記録

5年1組 情報更新 詳細表示 簡易表示

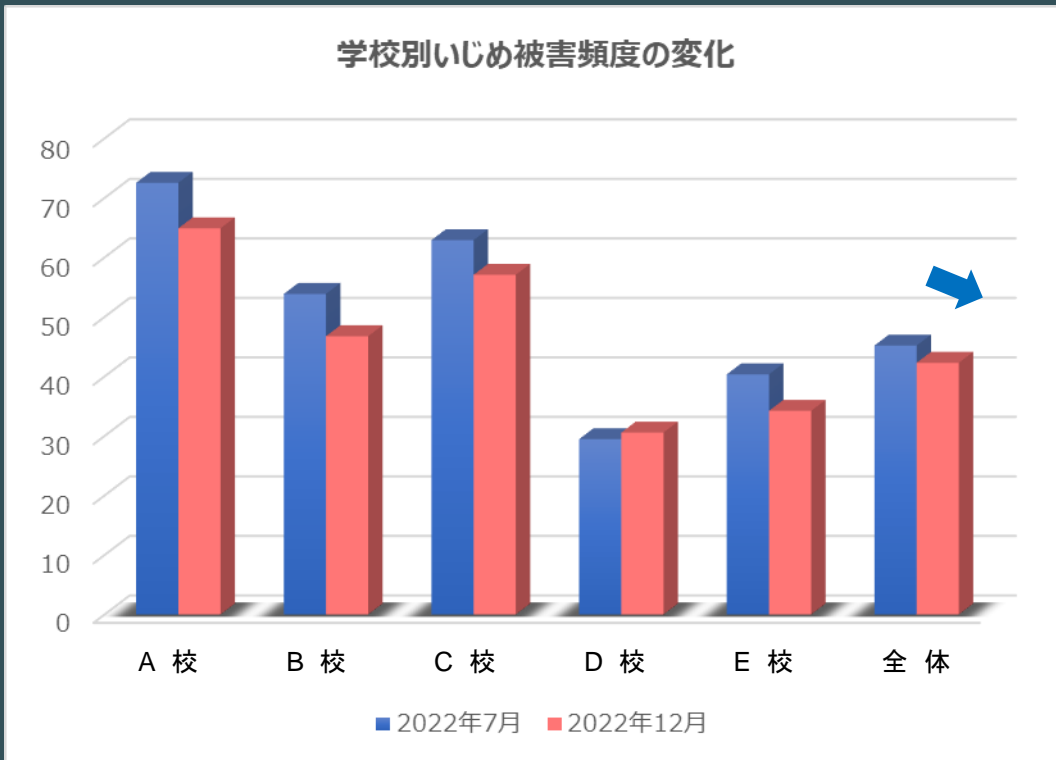
氏名	体温	発熱	咳	痰	嘔吐	下痢	頭痛	腹痛	アレルギー	その他	経過	経過	経過	経過	経過
1	35.4														
2	35.9	✓													
3	36.6														
4	35.1														
5	38.0														
6	36.9														
7	38.0														
8	37.7														

2023年1月

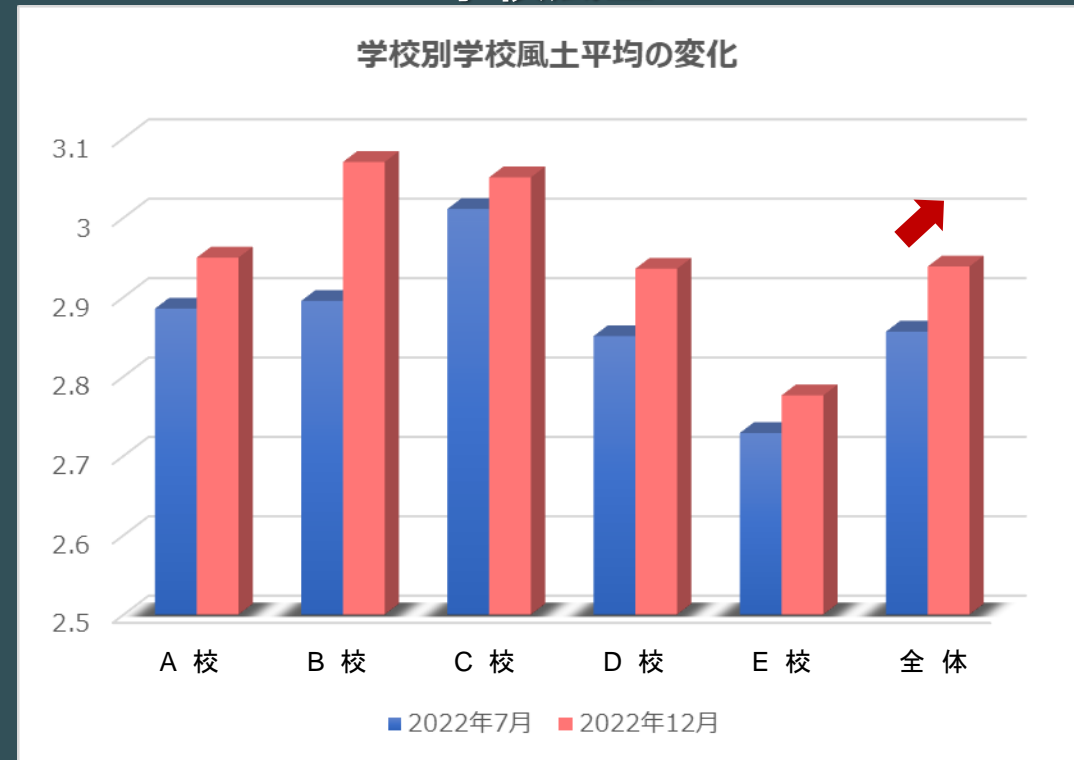
月	火	水	木	金	土	日
26	27	28	29	30	31	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15

2022年7月～12月 いじめ被害と学校風土の変化

いじめ被害

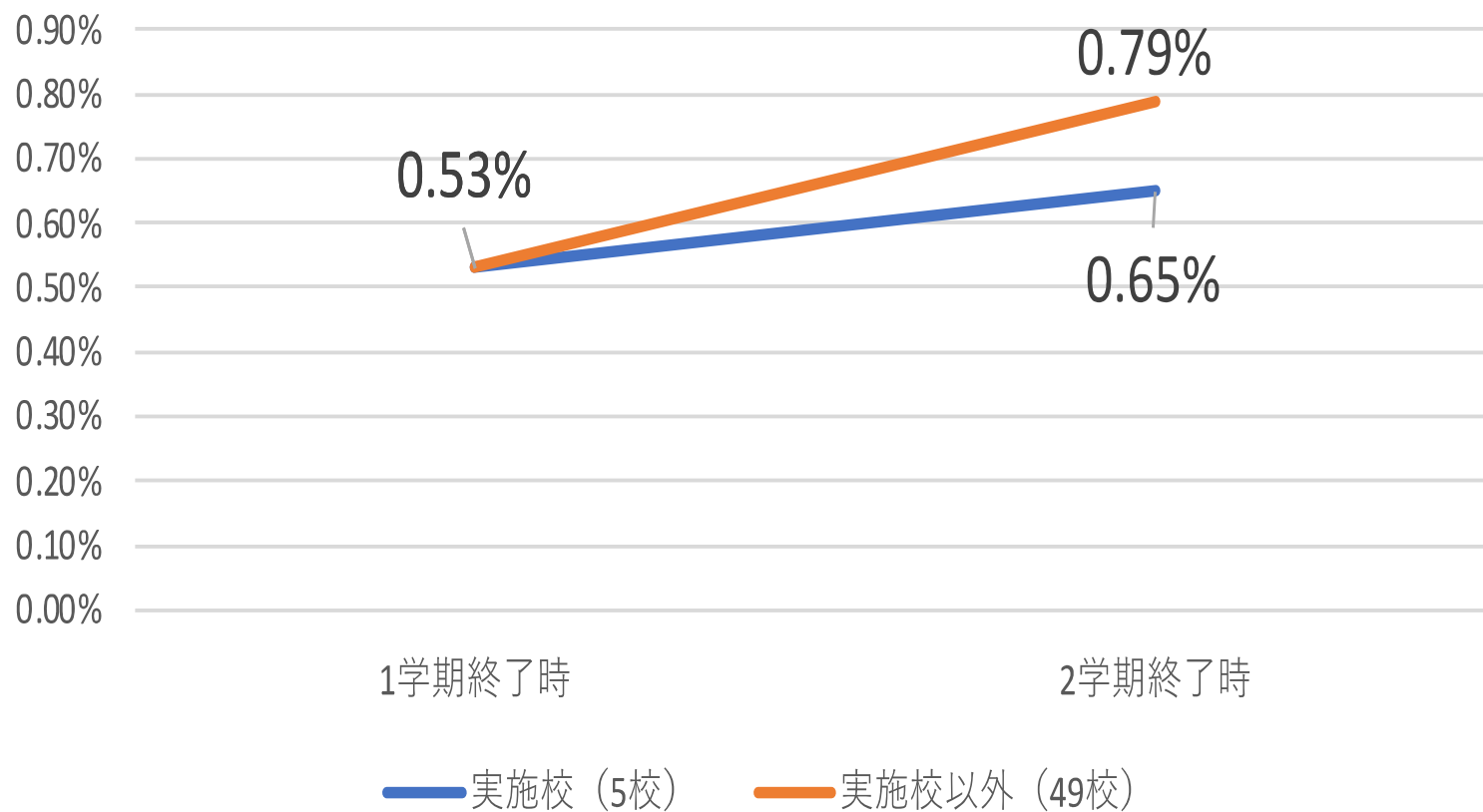


学校風土



デイケン実施校：新規不登校発生率

新規不登校発生率



- 実施校5校とそれ以外(49校)の平均値を比較した。
- 実施校の数が少ないため、統計解析は行わなかった。
- 実施校は、1学期終了後にデイケンを導入。
- 記述統計レベルではあるが、明らかにデイケン実施校の方が、不登校出現率が抑えられている。

	1学期終了時	2学期終了時
実施校 (5校)	0.53%	0.65%
実施校以外 (49校)	0.53%	0.79%

Tier 3. 不登校の児童生徒、一人一人の特徴を把握する

- データにより、不登校児童生徒の特徴、教育的ニーズを把握する
- それぞれの特徴に合った環境、教育をデザインする

《静的リスク×動的リスク》のマッチング

静的リスク

発達特性

感覚特性

メンタルヘルス

学力

傷つき体験

家庭環境

この他に性別・年齢、障害など

動的リスク

学級規模

物理的環境

学校風土※

授業※

教師行動※

活動内容※

※児童生徒の評価による



マッチング



Outcome

健康

Well-Being

社会集団適応
学校
特例校
その他の教育形態

「不登校」という言葉が意味をなさなくなり、**教育ミス** **マッチ問題**とされる時代に！

まとめ

- 「不登校になってからの対応」から、予防、早期対応、介入のRTIモデルへ
- エビデンスによる再現性のあるプログラムおよびシステムの開発と普及を
- 子どもが悪い、ということはない。子どもの不登校問題ではなく、教育ミスマッチ問題（Student-School Mismatch）としての把握と対策、整備へ